

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2016 冬期調査ニュースレター



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査は、干潟をはじめとした湿地生態系の健全性を測ることを目的に、干潟や淡水湿地を利用するシギ・チドリ類と絶滅危惧種であるズグロカモメ、クロツラヘラサギ、ヘラサギ、ツクシガモ(以下「シギ・チドリ等」という。)の個体数調査を、全国に約 140 箇所設置しているサイトで春期(4月から5月)、秋期(8月から9月)、冬期(12月から2月)の計3シーズンで実施しております。

本調査では、各シーズン中に基準日を設け全国一斉に調査を実施し、基準日近辺に国内に飛来するシギ・チドリ類等の総個体数を把握することを目的とした「一斉調査結果」と、シーズン中に飛来したシギ・チドリ類等が最も多く飛来した時の個体数を累計し、各調査サイトの環境収容力を把握することを目的とした「最大個体数結果」の2つの結果を報告しております。

「シギ・チドリ類調査ニュースレター」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年よりシーズンごとに発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことができます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

また、各期の調査報告や年度ごとの総括報告書では、全調査サイト配置図や全調査対象種の内訳、各調査サイトにおける調査結果等をまとめております。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター



モニタリングサイト1000



2016年 冬期概要

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2016年冬期の結果概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2016年度冬期概要をお知らせします。

個体数は前年よりやや増加

2016年度冬期調査は、2016年12月1日から2017年2月28日までの期間実施されました。115ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査(2017年1月15日を基準日とした前後1週間の調査)への参加は87ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類33種24,740羽が記録され、ツクシガモ2,202羽、ヘラサギ10羽、クロツラヘラサギ251羽、ズグロカモメ2,387羽が記録され、冬期の全サイトの最大個体数(調査期間内に記録された各種個体数の最大値)の合計では、シギ・チドリ類 39種48,680羽が記録され、ツクシガモ4,357羽、ヘラサギ40羽、クロツラヘラサギ395羽、ズグロカモメ3,583羽が記録されました。

1999年からの「全サイトの最大個体数の合計」と「連

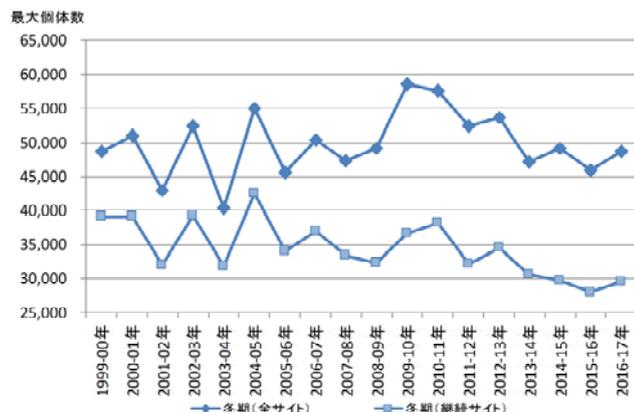


図1. 冬期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移 (2000年から2016年の継続サイトN=40)

表1. 2016年冬期調査の優占種

ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>	31,303	64.3%
シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	4,214	8.7%
ダイゼン	<i>Pluvialis squatarola</i>	3,677	7.6%
ミュビシギ	<i>Calidris alba</i>	1,767	3.6%
ムナグロ	<i>Pluvialis fulva</i>	1,340	2.8%
タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>	1,213	2.5%
メダイチドリ	<i>Charadrius mongolus</i>	972	2.0%
ミヤコドリ	<i>Haematopus ostralegus</i>	898	1.7%
タンシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	626	1.3%
アオアシシギ	<i>Tringa ochularia</i>	514	1.1%
その他	The others	2,216	4.6%
全種合計		Total No. of individuals of all species	48,680 100.0%

続して調査が継続されているサイトのみでの最大個体数の合計」を、グラフに示しました(図1)。全サイトの最大個体数の合計は、前年度冬期と比べ約2,800羽増加(+6.1%)しました。継続サイトでは前年度冬期と比べ約1,600羽増加(+5.6%)して、29,554羽となり、過去最低を記録した昨年冬期から、やや増加しました。

最大個体数における優占種の上位5種は、ハマシギ(64.3%)、シロチドリ(8.7%)、ダイゼン(7.6%)、ミュビシギ(3.6%)、ムナグロ(2.8%)で、上位種の順位に大きな変動はありませんでした(表1)。シギ・チドリ類以外で調査している4種では、ツクシガモ、ヘラサギ、クロツラヘラサギの個体数は前年に比べ大きな変化はありませんでした。ズグロカモメは、一斉調査期間に前年度冬期と比べ810羽増加(+51.4%)し、2,387羽が記録されました。有明海の大授揚、鹿島新籠海岸、八代海の不知火干潟で個体数が増加していました。冬期の調査期間を通じて、九州地方を中心に28箇所の調査サイトで観察されました。



写真1. ズグロカモメ (写真: 守屋年史)

ハマシギの比率は安定、個体数は減

図1に示すように冬期の個体数の全体的な傾向は2009年度から減少傾向にあります。次に最大個体数における上位5種の占める割合を図2に示しました。ハマシギは、越冬期に最も個体数の多い種になり、近年は70～60%の間を推移しています。シロチドリも2009年度付近から約8%で推移していました。しかし、両種とも観察個体数は減少しており、実際には総数も減



少傾向にあります。ダイゼンの割合は増加傾向にあり、ミユビシギは2015年度に割合を減少させていました。ムナグロも2012年度から近年から約2%で割合が推移しています。

越冬分布の変化？

上位5種以外では、近年アオアシシギ、イソシギ、タシギ、ミヤコドリが徐々に冬期の割合を増加させていました(図3)。アオアシシギは主に九州地域のサイトで個体数が増加傾向にあり、イソシギは確認されるサ

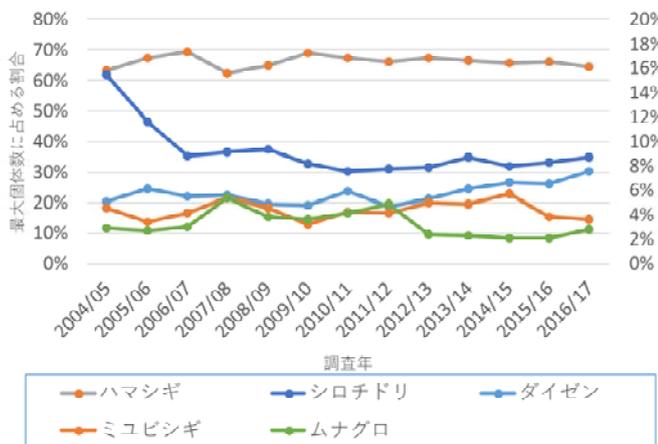


図2. ハマシギ、シロチドリ、ダイゼン、ミユビシギ、ムナグロの最大観察個体数総数に占める割合の推移
ハマシギのみ第1軸(左)

イトが多くなってきていました。タシギは調査サイトによって増減傾向が分かれていましたがサイト当たりの個体数が増加していました。ミヤコドリは、東京湾三番瀬の個体数増加が大きく影響していました。増加の原因は不明ですが、三番瀬の個体群が十分に冬を越せる貝類などのエサが取れるようになってきたのかもしれません。

また逆に冬期の割合が減少傾向にある種として、オオメダイチドリ、キョウジョシギ、ダイシャクシギ、トウネンがあげられ(図4)、それらの種が主に越冬する九州地域、沖縄や南西諸島のサイトで近年個体数が減少しており、冬期の分布が変化している可能性があります。周辺の韓国や中国、台湾などの状況についても、注目して行きたいと考えています。

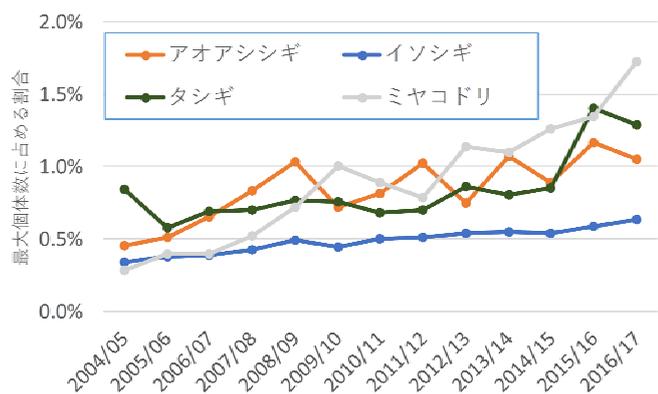


図3. 近年、増加傾向にある種の最大観察個体数総数に占める割合の推移

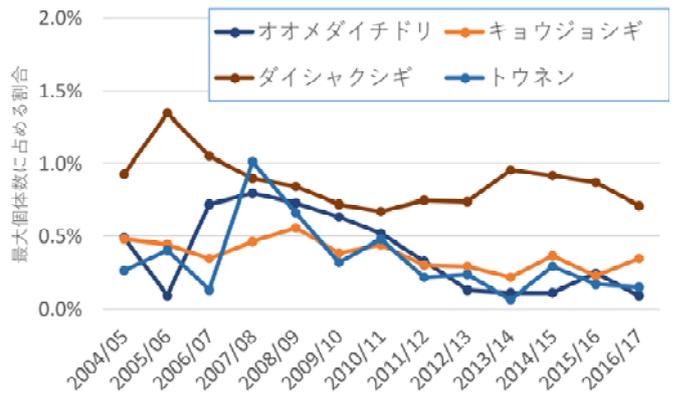


図4. 近年、減少傾向にある種の最大観察個体数総数に占める割合の推移

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:ハマシギ(守屋年史) 2016年 冬期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史 電話/Fax:042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp